

全国ホテル研究会情報交換誌

第43号

ホテル情報交換

(大場信義博士追悼号)

目次

大場信義先生を偲んで	1
会員便り	12
第53回全国大会報告	15
ホテル情報館	16
2020年ホテル発生状況調査結果	18
事務局だより	22

全国ホテル研究会

大場信義先生を偲んで

大場信義元会長の足跡

全国ホタル研究会事務局

- 1945年 鎌倉市に生まれる。
- 1975年 東京理科大学理学部、東レ株式会社基礎研究所、横須賀市公立中学校教諭を経て、横須賀市博物館学芸員。横須賀市博物館初代館長・全国ホタル研究会元会長の故羽根田弥太先生に師事して発光生物、とりわけホタル類の発光の研究を始める。
- 1983年 京都大学理学博士。
- 1996年 「森の新聞4ホタルの里」、フレーベル館、産経児童出版文化賞受賞。
- 2006年3月 同博物館定年退官。
- 2006年 大場蛍研究所所長、独立行政法人産業技術総合研究所客員研究員、中国科学院昆明動物研究所客員教授、横須賀市自然・人文博物館研究員、横須賀市長井海の手公園ソレイユの丘ホタル館顧問などを務める。生涯、ホタルについて個体レベルから分子レベルまで包括的に研究を進め、またホタルを通して環境科学の立場から全国各地で自然保全・再生を実践する。
- 2020年1月31日 永眠。享年74歳。



2017年7月 新潟県関川村大会



2015年6月 静岡県川根本町大会

1995－2000年 全国ホタル研究会会長
2000－2020年 全国ホタル研究会名誉会長
発表論文、著書は300編を超える。

ホタルに関する主な著書

- ホタルの観察と飼育（1981年，ニュー・サイエンス社）（中根猛彦氏との共著）
ホタルのコミュニケーション（動物—その適応戦略と社会）（1986年，東海大学出版会）
ゲンジボタル（1988年，文一総合出版）
ホタルの里（1996年，フレーベル館）
ホタルが先生ぼくらの環境学校：親子で楽しむ：図解（1997年，ハート出版）
だれでもできるホタル復活大作戦—ぼくらの町にホタルがもどってきた（2004年，合同出版）
ホタルの不思議（2009年，どうぶつ社）
田んぼの生きものたち ホタル（2010年，農文協）
こころも育つ 図解・ホタルの飼い方と観察（2012年，ハート出版）
ほか。

大場信義先生を偲んで

全国ホタル研究会会長 遊 磨 正 秀

京都市清滝川に大場信義先生をお招きしたのは、1983年6月29日のことだった。その夜、ゲンジボタルの産卵行動を二人で観察した。ことの起こりは、清滝川でゲンジボタルの雌が集団で産卵していることを1981年に報告したことからであった。当時、関東を中心にゲンジボタルを調査されていた大場先生には、清滝川で雌が深夜に集団で産卵していることは、とても奇異に思えたようだった。大場先生にとっては、ゲンジボタルの活動は深夜にはおさまりに、雌は個々に産卵しているのが当たり前のようなものであった。その集団産卵を目の当たりにされた先生と、なぜ関東と関西で発光習性や活動時間、産卵行動が違うのか、主に比較的狭い谷（谷戸）に住む関東のゲンジボタルと、広い河川にも生息する西日本のものと、なぜこうも生態が違うのか、清滝の民宿の部屋で夜を徹して話し合った。

1983年に京都大学理学部の日高敏隆先生の指導のもとで博士号を取得された大場先生は、以後、立て続けに『ホタルのコミュニケーション』（1986年，東海大学出版会）や『日本の昆虫12ゲンジボタル』（1988年，文一総合出版）などを著され、それらは私のバイブルとなった。

そしてホタル類の発光行動を主テーマに研究を続けておられた大場先生は、ゲンジボタルにおいても、日本各地での発光パターンを詳細に調査され、東日本と西日本で発光速度（発光型、いわゆる2秒型と4秒型）が違うことを明確に示された。そしてその研究は、遺伝子型の研究も含め、今日の地域間のホタルの人為的移動を戒めることの礎となっている。

日本全国から世界各地まで、ホタル調査を繰り返されてきた大場先生は、その成果から、全国ホタル研究会においても、イリオモテボタルやクメジマボタルの産卵生態、東南アジアや中国

の水生ホタルやホタルに擬態する昆虫など、さまざまな不思議なホタルの暮らしぶりを丁寧に紹介された。

大場先生はホタルの保護にも熱心で、地元では、横須賀市の長井海の手公園ソレイユの丘においてせせらぎを整備し、ヘイケボタルやゲンジボタル成虫の発生に導いている。その他、多くの地域においてホタル保護に関する指導・助言を行われた。その中で、ホタルが減少した原因として、水田耕作方法の変化、人工照明の影響、外来種の移入、水質悪化・開発による水源枯渇、捕獲などを挙げられる一方で、各地での地域ぐるみの水辺再生の取組みを推奨され、小学校での水辺づくり、ホタルを通じた地域と学校の連携、世代を超えたコミュニケーションの場、地域への愛着など、ホタルを通じて人の輪を広げる努力も惜しまれなかった。

全国ホタル研究会の大会では、小学生による発表も多く行われており、大場先生はいつもここにこと発表をご覧になりながら、優しい助言をかけておられた。

日本のホタルの大家、大場先生が亡くなられたことは、当会のみならず、ホタルの研究・保護等にかかわる多くの方々にとって大きな痛手である。あらためて先生の多大なる功績をたたえとともに、先生のご冥福を祈りたい。

大場信義先生との思い出

岡 本 勇
(岡山県倉敷市)

大場先生との出会いは、平成5年(1993年)に倉敷市役所児島支所産業課の土木技術職員として、自然崩落の進んだ農業水路児島由加74号水路(愛称は蛭遊の水辺・由加)をホタルの住みよい多自然型水路に改修する担当になり、ホタルの生態・観察法を学習するために、大場信義(1981年)「ホタルの観察と飼育」と南喜市郎(1983年)「復刻ホタルの研究」、解説大場信義の2冊を購入してからです。

中でも、「ホタルの観察と飼育」の本を手あかが付くまで読み込み、ホタルの生態・観察を、水路設計に生かしました。

平成6年度(1994年)～平成7年度(1995年)長さ105mの水路改修工事を施工してからも、大場先生の著書「ホタルの飼い方と観察」・「だれでもできるホタル復活大作戦」・「ホタル田んぼの生きものたち」・「ホタルの木」を購入して、改修水路のホタル調査や室内水槽での飼育研究などに今でも参考書として重宝しています。

どの本も、読みやすくて詳しい説明・豊富な図解と写真で構成されていて何年間使っても色あせない内容です。

大場先生と行動を共にさせていただいたのは、平成19年12月9日(2007年)岡山県自然環境課主催の岡山県浅口郡鴨方町(現浅口市鴨方町)鴨方中央公民館で行われる「ホタルと人のe関係シンポジウム」に出演するために12月8日来岡されてからの2日間でした。

12月8日午後に倉敷市児島由加74号水路の現地を見ていただき、樹木の管理・川底の管理やヒ

メボタル生息場所の保護方法など貴重な意見を多数いただき、大変参考になりました。

また、現地へ向かう車内で、地域によるヒメボタルの大きさの違い・発光時間の違い・ホタル標本は乾燥ではなくアルコール標本にすると将来DNA分析が可能など、盛りだくさんの情報も教えて頂きました。

翌日12月9日鴨方町のシンポジウムでは、大場信義先生、故・梶田博司先生（元川崎医療福祉大学教授）、矢掛高校の先生、金光町のホタル保護団体会長と私の5人のパネリストが、ホタルの生態・保護・研究・生徒とのつながり等について講演を行いました。

基調講演で大場先生がパワーポイントを使いヤエヤマボタルの生態を詳しく説明されました。

ヤエヤマボタルメス成虫が産卵後に卵を抱いて美しく発光している衝撃的写真は、今でも鮮明に記憶に残っています。

昼食の際には、ヤエヤマボタルやヒメボタルの詳しい生態について話していただき、私の宝である大場先生の著書「ホタルの観察と飼育」にサインまでしていただきました。

パネルディスカッションでは、ホタルの保護と公共工事のバランスやホタルにやさしい水路工事について大場先生から貴重な意見や提案をいただきました。

今でも、夢のような2日間が忘れられません。

全国ホタル研究会2020京都大会で、私が児島由加多自然型水路改修について発表予定でしたので、全国ホタル研究会名誉会長（第6代会長）の大場先生にお会い出来ると楽しみにしていましたが、その願いは叶えられませんでした。

ホタル学習の師であり憧れであった大場先生、ありがとうございました。

安らかにお休みください。



パネリスト集合写真 ホタルと人のe関係シンポジウム

於：平成19年12月9日(2007年) 岡山県浅口郡鴨方町

大場信義先生（中央）、故・梶田博司先生（向かって右から2人目）、
県立矢掛高校の先生（右端）、金光町ホタル保護団体会長（左から2人目）と私（左端）

大場先生との思い出

守山市ほたるの森資料館 並 河 總
(滋賀県)

当資料館先輩より大場先生には色々とお世話になっていとお聞きしていましたが、第52回全国ホタル研究大会に参加し、先生の素晴らしい取り組みに感心するとともに、ホタルにいっぱい愛情を注いでこられた先生に感銘を受けました。また、久米島ホタル館前でいっしょに撮らしていただいた写真は、私達の大切な宝物となりました。大場信義先生、ほんとうにありがとうございました。

大場信義先生との思い出

沼津ホタル保護研究会 大 竹 ゆみ子
(静岡県)

大場信義先生の訃報に接し、急なお別れに驚き、嘆き、悲しみに暮れています。

先生には、長い間、御指導頂き、心よりお礼申し上げます。

沼津ホタル保護研究会（以下、沼ホ研）は「愛鷹広域公園」、「旧少年自然の家」の中を流れる葛原沢川（くずはらさわがわ）の森で蛍の保護活動をしています。

大場先生にご指導頂いたことを上げてみますと、

- 1989年 「沼津ゲンジボタル 発光パターン 中間型の特殊性」を発見し、お示し頂いたこと。発光パターンは東日本型4秒、中間型3秒、西日本型2秒で、第26回全ホ研、沼津大会、巻頭に論文として掲載頂きました。
- 大場先生のご紹介で、横須賀自然人文博物館での展示会へ、沼津ホタル研究会の会員が参加し、「ホタル点滅の不思議 地球の奇跡」を学び、教書を26名の会員が購入させて頂きました。
- ご指導頂いて続けている沼ホ研の子供達のエコクラブが、2011年の沼津市エココンテストで入賞しました。
- 静岡県内で開催された数々のホタルサミットで基調講演を行って頂きました。2015年、第48回全国ホタル研究会 静岡県川根本町大会。静岡県ホタル保護研究会の伊豆湯ヶ島ホタルサミット（2014年）、小山町ホタルサミット（2015年）、沼津ホタルサミット（2017年）。大場先生のホタルについての奥深いご講演に魅了され、ホタルファンが増える手ごたえをいつも感じていました。
- 沼ホ研では、毎年6月に「沼津ホタルまつり」を開催し、沼津市広報誌、沼津カレンダーにも恒例行事として掲載され、好評を得ています。沼ホ研の会員が、ご来場のお客様にホタルの生態等を、わかりやすく説明するために、パネルを作成し利用していますが、そのパネルの基本データ、写真等の多くを、大場先生よりご提供頂いています。また、歴代会長（大竹和男、下田城二、稲葉徹）の尽力で大場先生に来临頂き、有意義な時間を過ごしてきました。以上のように、沼津のホタル保護活動は、いつも大場先生のご指導があり、会員はもとより、

お話を伺った人達は、虫を勉強し、理解し、大切にし、大場先生を忘れることはできません。

沼津のホテルが光るときは、大場先生の功績が、共にいつも輝いています。大場先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 令和2年10月23日

大場先生との思い出(追悼文)

守山ホテル研究会 中 島 耕
(滋賀県)

この度は、大場信義大先生のご逝去の報を知り、1月31日に亡くなっていたとは、信じられませんでした。この度はご愁傷さまでございます。心よりお悔やみ申し上げます。

ご看病のかいもなく残念でなりません。悲しい限りです。私が逝去の報を知ったのは、(元役員でしたが)この10月1日で、9ヵ月も過ぎていました。大場先生には、2000年の第33回全国ホテル研究大会守山大会(平成12年5月26日から3日間:市民ホール)に、ひとかたならぬお世話になり、頭の下がる思いでした。訃報を知り、どうしてよいかわからず、早速、先生の奥様に電話して、お悔やみを申し上げ、お話をさせていただきました。できれば先生宅へ寄せていただき、仏様に線香を上げ、お参りしたく思っています。

大場信義先生に感謝を込めて

新 村 光 秀
(石川県金沢市)

大場信義先生が急逝されたとの連絡を受け、あまりにも突然のことで驚きと悲しみで胸が一杯になりました。大場先生とは昨年4月の沖縄県久米島町での全国ホテル研究大会でお会いしたのが最後となりました。今年の全国大会で再会できることを楽しみにしておりましたので本当に残念でなりません。公私にわたりホテルについてご指導ご助言をいただき、かけがえのない存在であられた先生の早すぎる別れに言葉もありません。

私と大場先生の出会いは、先生が昭和56年に共著で出版された『ホテルの観察と飼育』でホテルの生態を学ばせていただいたことが始めです。当時、金沢市の公害センターに勤務していた私は、川や用水の水質浄化と市民の環境保全意識の高揚にホテルを活用できないか考えていた頃であり、先生の著書から得た知識や情報をもとに、昭和62年から市の施策として「ホテルの舞う美しい水辺環境づくり事業」を提案し、担当することになりました。全国ホテル研究会にも参加させていただき、先生をはじめ多くの方々からホテルの生態や飼育、生息環境などについて学ばせていただきました。そんな中、平成2年5月に金沢で全国ホテル研究大会を開催することになり、市民への啓発事業として金沢ホテルの会主催のホテル講演会を開催し、先生に「ホテルの生態とその保護について」を演題にご講演いただきました。その後、当会の10周年、20周年、30周年の

各記念講演会に講師をお引き受けいただき、ホタルの不思議や魅力をお話いただきました。金沢ホタルの会の発足から30年にわたり当会を支えていただきましたことに深く感謝申し上げます。

私の知る先生はとてもシャイな方で、ホタルや生き物に関することはとても熱く語られ昆虫少年のような方でしたが、それ以外では人と話をされることが苦手なようで、いつも同伴されていた奥様の詔子様笑顔で応対されていました。全国ホタル研究大会や当会の記念講演会にもご一緒され、お二人にお会いすることが楽しみとなっていました。

平成17年1月に横須賀市自然史博物館で開催されていた特別展示「ホタル点滅の不思議—地球の奇跡」を見学させていただき、お忙しい中、先生からも展示のご苦労などを伺いました。ホタル研究の経緯、ホタルの種類や生態、全国の取り組みなど、先生のホタルに対する思いが溢れる展示内容でした。その後、横須賀市長井海の手公園ソレイユの丘ホタル館の館長になられたことから、平成19年8月にホタル館を見学させていただきました。ホタル館には先生の貴重な研究資料があり、ヘイケボタルのすむ水路復元の取り組みについても説明をいただきました。この時も先生の専門的な話と奥様の屈託のない笑顔の分かりやすい話で盛り上がり、時間の経つのも忘れる楽しい思い出をいただきました。昆虫博士・昆虫少年とその秘書というお二人の関係が、先生の研究を支えておられたのだなと思いました。私が持っています先生の著書のあとがきを見ますと、『ゲンジボタル（1988年著）』には「私がホタルの研究に専念できたのは妻詔子の全面的な協力による。」、『ホタルの飼い方観察（1993年著）』には「ホタルの研究に没頭できたのは妻詔子の支えがあった。」、『ホタルの不思議（2009年著）』には「私のライフワークともいえるホタルの研究をこれまで続けることができたのは、妻詔子と息子たちの理解と協力があったことによる。」と記されており、先生が奥様の全面的な協力を感謝している様子を伺い知ることができます。



ホタル講演会(平成2年)



ソレイユの丘ホタル館(平成19年)

先生との思い出は尽きませんが、先生からいただいたご厚情に感謝申し上げますとともにご冥福をお祈りし、私も残された人生をホタルと共に歩みたいと固く誓いました。

合掌

大場先生ありがとうございました

水野正秋
(石川県金沢市)

三十年以上にわたり、私たち金沢ホテルの会へのご指導をいただいた大場信義先生が1月末にお亡くなりになりました。74歳という若さで、とても残念です。今でも亡くなられたことが信じられません。

先生との最初の出会いは、全国ホテル研究会の広島大会（1987年）か、青森大会（1988年）だったと思います。先生は、まだ40代の若々しい紳士で、とてもつやのある顔で極めて活動的に見えました。当時は、横須賀市の博物館の研究員をされておられた時期だと思います。いつお会いしてもニコニコ対応していただき、人の話に聞き上手で、一見女性かと思うくらいのやさしい話し方。人の悪いことは一切口にするのではなく、少しでも良い所を見つけては認め、評価しておられました。ある全国大会では、他所から持ってきたと思われるホテルのことをあまり責めることをなさらなかったと思います。むしろホテルを増やそうとする地元の方々の取り組みの熱意や努力を高く評価しておられました。また、最近の大会では、ホテルの現地観察の際に、先生がホテルの光を一瞬見られて「あっ」と。私が、「このホテルとちょっと違いますね。」と言うと、「そうですね。（この地にいるはずのない）2秒型ですね。地元の人には何も言わないでおきましょう。」と小さな声で言われました。また、「後でこっそりと伝えましょう。」と言われました。この時ほど先生のやさしいお人柄を強く感じたことはありませんでした。

私が、全国ホテル研究会の全国大会に毎年のように参加するのは、大場先生にお会いするのが楽しみだったからです。大会で先生のホテルの話をお聞きする、そのために大会へ参加していたと言っても過言ではありません。ホテルの新しい話、不思議なホテルの生態などの研究成果、珍しい外国のホテルの写真など、どんな話をされるかわくわく期待して行きました。その期待を裏切ることなく毎回満足して金沢へ帰ってきました。お酒をあまりお飲みにならない先生にと、大会に行く時には必ずといっていいほど、金沢のお土産の『キンツバ』をお持ちしました。キンツバをお渡しして一言言葉を交わすことが当たり前のようになっていました。

金沢へは、ご夫婦で何度も来ていただき、ご講演やご指導をいただきました。金沢での全国大会(1990年)の時はもちろん、金沢ホテルの会の発足時(1989年)、10周年(1999年)、20周年(2009年)、30周年の各記念講演(2018年)、金沢市平町の活動の指導などで本当に何度も来ていただきました。30周年の時には、ご講演いただいた翌日に、白山市やひこの里や渡津のホテル発生地での現地を見ていただきました。「来年は、ホテルの時期に渡津のホテルを見にもう一度是非訪れたい。」とおっしゃっておられましたが、体調がよくないということで叶いませんでした。ホテルを見ていただくことをとても楽しみにしていたのですが、とても残念です。

今でもバックをたすきにかけて先生が、私たちに何か話しかけようとしてこちらに歩んでくるように思えます。

先生、長らく大変ありがとうございました。安らかにお休みください。私たちは、先生からご指導いただいたことを忘れることなく、石川のホテルの光を守る活動に頑張りたいと思います。



1990年 金沢ホテルの会10周年記念祝賀会



2010年 長野・志賀高原大会



2012年 鹿児島大会



2018年 現地視察(白山市渡津)

大場さんを偲んで

元全国ホテル研究会編集委員 後藤好正
(神奈川県横浜市)

今年1月に、大場さんが亡くられました。全国ホテル研究会では副会長・会長を歴任されるとともに、多くの会員に助言や指導をされ、会にとってなくてはならない存在でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

私が初めて研究大会に参加したのは1985年の第18回横浜大会で、開催地の一員としてでした。個人としての参加は、それからしばらくした第23回金沢大会からで、そのころは村上美佐男さんが事務局として会の運営をされていましたが、まさに孤軍奮闘という感がありました。大場さんはそのような状況を改善し、組織的な運営を考えておられました。その年に事務局は横須賀へ移り、村上さんは会長に、圓谷哲男さんが事務局長に就任されました。事務局の仕事の中で大きなものに研究会誌（大会誌）と情報交換誌の編集・発行があります。大場さんは事務局の負担を減らすために両誌の編集作業を圓谷さんと一緒に行っていましたが、当時大場さんと一緒に調査を行うことが多かった私や鈴木浩文さん、佐藤安志さんがお手伝いをするようになりました。しばらくはその体制が続きましたが、大場さんは、これからは会の事務と編集業務を分けて行きたいと考えておられ、横須賀と距離的にも近かった私が編集の中心にあたることになり、編集委員会を組織することになりました。1995年に大場さんは村上さんの後を受けて会長に就任しますが、2000年で会長を退かれたのも、できるだけ多くの方が関わるべきだというお考えからでした。

私が両誌の編集に関わっていた間も、誌面の構成について時に相談し、時にご助言いただきよりよい形を模索していきました。その中でできるだけ多くの会員の参加を願ってアンケートを始めたりもしました。また、できるだけホテルに関わる情報を皆さんにと、文献紹介も始めましたが、そのさいも情報を提供してくださいました。こうした取り組みが少しでも皆様のためになったのであれば、大場さんも喜んでくださるのではないかと思います。

大場さんには全国各地の調査にも同行させていただきました。イリオモテボタルのオスの発見やクメジマボタルの明け方のメスの群飛、オキナワスジボタルのオスの消光群飛との遭遇などは、今でも忘れられません。シンガポール動物園のナイトサファリのための予備調査では、マレーシアの動物園で、病気治療のために隔離されていたオラウータンの子供を抱くという珍しい経験もしました。

こうした調査行ではいろいろなことをうかがいましたが、よく話されていたことをいくつかご紹介します。

大場さんは仕事柄、日本各地への生息地を調査されていましたが、地元の保護団体や自治体の方によく「うちのホテルが日本一ですよ」と聞かれたといいます。もちろん地元の方は大場さんの“日本一”のお墨付きを求めてのことでしょう。そんな時、大場さんは「ええ、日本一ですよ。それぞれ（の生息地）が日本一です」と答えていたそうです。SMAPの曲『世界で一つだけの花』に「NO.1にならなくてもいい、もともと特別なOnly one」という歌詞がありますが、同じようにホテルの魅力は決して数の多寡だけではない、背景も環境も違うものを比較することはできないし、それぞれの生息地にそこだけの魅力がある、それが大場さんの考え方でした。

研究の姿勢についてもよく話されていました。その研究はできるだけ広い視野で俯瞰的に見ること、重箱の隅をつつくような研究ではだめだということでした。当時、ホタルの調査を始めたばかりの私への助言だったと思います。ただ私自身は、情報交換誌にも書いたことがあったと思いますが、アマチュアはプロの補完として、時には重箱の隅をつつくようなことも必要ではないと思っています。チョウがあればほど多くの知見を蓄えられたのも、多くのアマチュアが小さな情報でも丹念に記録していったからではないでしょうか。

また、大場さんは研究のオリジナリティの大切さもよく話しておられました。長崎大会の後、熊本県の旭志村と宮崎県の北川町（いずれも当時）に調査に回った時のことです。宿で夜、私の今後の研究について、どうして行くのか聞かれました。大場さんはホタルのコミュニケーションを中心に研究を進められていましたし、鈴木さんや佐藤さんは遺伝子解析という手法でホタルにアプローチしていました。では私はというと、特に専門があったわけでも知識があったわけでもないのに、明確な答えを出すことができませんでした。ただ、あくまでホタルの研究は趣味でしたので、一アマチュアとして日本産のホタルの生活史や活動習性を明らかにしたいという希望を漠然ともっていました。現在は諸事情により日本各地にホタルを求めて出かけることもできなくなり、もともとの興味対象としていたホタルの文化誌について細々と調べていますが、今ではこれがその時の答えだと思っています。いくつかまとめた報文は、幸いにも好意的に評価していただき、ご自身のブログに引用していただいた方もおられます。

研究大会に参加していた最後の頃は、大場さんとは大会でお目にかかるくらいでしたが、その際、会のこれからのあり方について話をすることも多くありました。さまざまな課題はありますが、会の発展と会員のみなさんの活躍、そして何よりもホタルの灯を消さないことが大場さんへの恩返しになるのではないのでしょうか。

編集後記

情報交換誌第43号をお届けします。名誉会長の大場信義先生が逝去されましたので、本号では会員からの追悼文を掲載しました。また、本年も多く会員の方から、情報や原稿をいただきました。御礼を申し上げます。

本年延期となりました第53回大会は、京都府京都市で、令和3年6月11日(金)から6月13日(日)までの期間に開催される予定です。京都大会実行委員会を中心に企画される予定です。たくさんの会員の参加をお願いします。では、大会でお会いしましょう。

なお、ホテル関連文献目録の作成に当たり、元編集委員長の後藤好正氏から多くの情報をいただきました。感謝の意を表します。

(編集委員長 高見明宏)

全国ホテル研究会事務局

〒808-0146 福岡県北九州市若松区高須西1-4-13 エコプラン研究所内

TEL 093 (741) 5189 FAX 093 (741) 5089

ホームページアドレス <http://zenhoken-std.sakura.ne.jp>

郵便振替 (00200-5-50096, 全国ホテル研究会)

銀行口座 (福岡銀行 高須支店, 普通, 430690, 全国ホテル研究会)

全国ホテル研究会情報交換誌

第43号

2020年12月20日発行

発行者 遊磨正秀

発行所 全国ホテル研究会

印刷 システム印刷株式会社

東京都日野市高幡1012-13

(無断複写・転載を禁ず)

